

ジョン・ウィットク ~  
フェイクファミリー ~

赤備え

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて血の捺印を交わしたサンティーン・ダントニオにより限りなく不可能に近い殺しの依頼を受けたジョン・ウィツクは自身が育てた義娘のヨル・フォージャーに協力を要請した。それは夫婦とその娘と義父の奇妙な偽りの家族生活の始まりだった。

第1話

# 目次

1



## 第1話

亡き妻が残した愛犬をかつて雇われていたロシアンマフィアに殺され、怒りに震えたジョン・ウィツクの壮絶な復讐劇から数日後、彼の元へとある男が訪ねてきた。

「やあ、ジョン。久しぶりだな」

彼の名はサンティーノ・デズモンド。イタリアのマフィア『カモツラ』の幹部である。  
「……ああ」

「入ってもいいか？」

ジョンが扉を開けてサンティーノを中へと入れた。突然の来訪に彼は途轍もなく嫌な予感を覚えた。

「コーヒーでも」

「ああ、いたどころ」

差し出したコーヒーを一口飲んでテーブルに置くとサンティーノは悠然とした態度で口を開いた。

「ジョン、君が殺し屋家業を辞められたのは他ならぬ私のおかげだ。その借りを返す時だぞ」

「……悪いが力になれない。俺はもう殺し屋ではないんだ」

「誓印の掟を忘れたのか？」

誓印とは殺し屋などが利用できるコンチネンタルという機関特有の規則で相互の交換条件を血の捺印をもって契約として交わしたメダル状の証の事である。この契約は絶対遵守であり拒否したり相手の契約者を殺すと規約違反になり抹殺されてしまう。

「……俺に誰を殺させたい」

「私の兄であるドノバン・デズモンドを殺して欲しい」

「何……!？」

サンティーンノの兄は東人民共和国（オスタニア）で国家統一党の総裁として絶大な権力を持つ人物で裏の顔は『カモツラ』のボスとして、そして様々な犯罪組織が集まって出来た組織『主席連合』の代表の一人でもある。

「父が私ではなく兄を後継者として指名したおかげで私は末端の幹部に成り下がっている。それは耐え難く苦痛だ。私が総裁として主席連合の代表になれば組織をもっと大きくできる」

「……期限は」

「今すぐにも殺してくれ、といたいところだが流石に闇の者フギーマンと呼ばれた君でもかなり難しい任務になるだろう。今日から6ヶ月後までがタイムリミットだ」

「……分かった」

「ありがとうジョン。君なら必ず依頼を受けてくれると思ってたよ」

初めから拒否権はない。もし逆らえば大切に行っている自宅や新しい飼い犬を平気で壊すだろう。サンティーノはそういう男だ。

「方法は何でもいいが、私が指示した事を知られないようにしてくれ。頼んだぞ」

「ああ、分かった」

サンティーノが自宅から去った後リビングのソファで横になり天井を見上げながら思案に耽っていたジョンは思い出したかのようにポケットからスマホを取り出すとある人物へ連絡をとった。

「ヨル、手を貸してくれないか？」